

Ⅷ 冷えによる下部尿路症状に対する 漢方薬の効果

地方独立行政法人 桑名市総合医療センター泌尿器科

木瀬 英明

【目的】

冷えによって頻尿や尿意切迫性が悪化することは日常診療でよく経験する。しかし、その機序は複雑で不明な点が多く、満足できる治療法が存在しないのが現状である。本研究では、冷えによって下部尿路症状が悪化した患者に対し漢方薬を投薬し、その効果を後ろ向きに検討したので報告する。

【方法】

冬期になり、夏季と比較して下部尿路症状の悪化を訴え、漢方薬を2週間以上投与した患者22人(男性18人、女性4人)を対象とした。内服している薬剤(抗コリン剤など)は継続した。薬剤選択基準は、手足の冷えや消化器症状を訴える場合は当帰四逆加呉茱萸生姜湯、頻尿、下肢の冷え、皮膚乾燥などの腎虚の所見をもつ場合は八味地黄丸、これに加えて下肢浮腫を持つ場合は牛車腎気丸、腹部の冷えに対しては人参湯を投与した。評価はIPSS、OABSS、冷えに対する問診で行った。

【結果】

平均年齢中央値は73歳、前立腺肥大症11例、過活動膀胱8例、前立腺癌2例、未治療は3例であった(重複あり)。冬期になり悪化した下部尿路症状は、頻尿19例(86.3%)、尿意切迫性7例(31.8%)、失禁2例(9.1%)であった(重複あり)。また、冷え性を自覚している患者は15例(68.2%)であり、部位別では下肢9例、四肢末端(8例)、腹体幹1例であった。投与薬剤は八味地黄丸5例、牛車腎気丸11例、当帰四逆加呉茱萸生姜湯8例、人参湯1例であった(重複あり)。治療前後におけるIPSSの改善は17例(77.3%)に認められ、このうち3点以上改善したのは15例(68.2%)であり、全体のIPSS中央値は12.0点→9.0点と有意に低下した。OABSSは15例(68.2%)に改善を認め、このうち7例(31.8%)は2点以上改善し、中央値は6.0点→5.0点と有意に低下した。夜間排尿回数は2.8回→2.0回、QOL スコアは3.5点→2.5点と有意に改善した。また、冷え症に関しては15例中13例(86.7%)において改善を自覚した。冷え症有無の2群間に治療開始前の下部尿路症状に有意差は認められなかったが、漢方薬投与後の治療効果の比較では、冷え性のない群に治療効果が高い傾向が得られた。薬剤別の治療効果は補腎剤(八味地黄丸or牛車腎気丸)+当帰四逆加呉茱萸生姜湯の併用が有効であったが、有意差は認められなかった。

【考察】

寒冷刺激誘発頻尿の原因は多彩であり、尿意知覚路の交感神経や無髄C繊維の興奮、皮膚の冷感受性チャネルであるTRPM8の刺激、抗利尿ホルモンの分泌抑制、足先の冷え、閉経、生活習慣病などの関与が報告されている。今回用いた当帰四逆加呉茱萸生姜湯は、末梢循環を改善し冷え症に効果があることが報告されている。また、牛車腎気丸(八味地黄丸)は末梢循環の血流改善作用に加えて、膀胱不随意収縮の抑制効果、寒冷過敏の緩和作用などが報告されている。患者の状態(証)から適切な漢方薬を選択し投与することは、冷え症の改善だけでなく、寒冷刺激誘発下部尿路症状に対しても有効であることが示唆された。